

「八重研究 第2ステージ 八重像を求めて －会津・覚馬・襄」シンポジウム報告

本年（2013年）度の第一部門研究8月の一日研究会（8月3日、於寧静館）では「八重研究 第2ステージ 八重像を求めて－会津・覚馬・襄」というテーマを設定し、シンポジウムを開催した。NHK大河ドラマがきっかけとなり、前年度は八重研究の現状と課題を明らかにするために八重研究に関わる合計10冊の八重本の書評を一日研究会でとりあげ『新島研究』104号で報告した。本年度は、これまでの八重像の理解に関する議論においては「会津」というファクターが抜けていたことに鑑み、会津、覚馬および襄の3つのキーワードをもとに、八重像を浮き彫りにすることが有効であると考え、北垣宗治氏（会津）、井上勝也氏（覚馬）、伊藤彌彦氏（襄）の3氏に研究発表をお願いし、以上の3編の招待論文におまとめいただいた。

来年度はNHK大河ドラマ終了後、部門研究として八重研究の第3ステージとして総括を行い、われわれとして八重をどのように理解すべきか、その一つの方向性やコンセンサスを明らかにしたいと考え、シンポジウムを企画する予定である。

なお、3人のプレゼンターによる3編の招待論文については、発表内容を忠実に再現しているとは限らない。発表者の裁量に委ね、発表原稿に加筆、編集しているケースがあることを申し添える。

研究発表の後に持たれた総合討論の様子を録音テープを元に編集委員会により以下に再現した。発言された方々の名前が判明できる場合と不明の場合が有り、かつ発言者に校正いただく時間が無いことをふまえ、編集委員会の責任で紙幅の関係も含め内容を編集し、さらに匿名にさせていただいた。ご諒恕下さる事をお願いしたい。

第一部門研究（新島研究）代表 露口 卓也

シンポジウム総合討論

露口：では、そろそろ、時間になりましたので、最後の総合討論に入りたいと思います。まず、われわれ4人で少し話をして、また、フロアからの意見は後で頂戴をするということで進めていきたいと思います。最初にお三人のご報告がありましたので、時間も限定されましたから、何かそれぞれ付け加えられることがあればお話頂けますでしょうか。



会津戦争と第二次世界大戦

北垣：私の話の終わった後で、「松平容保はリーダーとして失敗はなかったのでしょうか」、とのご質問をいただきました。私は容保にもいくつか失敗はあったと思います。彼が早く京都を引き上げる決断をしていたならば、会津藩の悲劇は起こらなかつただろうという気はしますね。

それから、もう一つの点は、会津の厳しい教育の結果が、ああいう悲劇になったかもしれない、ということです。第二次世界大戦に至るまでの日本の軍国主義が日本の悲劇を招きました。それでは、じゃあ、あの厳しさではなしに、もっとルースであつてもよかつたのではないか、という問題が起こってきますね。アメリカという国を見ておりますと、アメリカには、非常にルースな点があるように思うんですよ。アメリカの軍隊を時々映画なんかで見るとね、日本の軍隊では絶対に許されないようなことを平気でやっているわけです。怠け者を許す寛容さがアメリカの軍隊にあるという気がいたします。また、イタリアという国は、本当にルースな国でありまして、私は何年前にイタリアでひどい目に遭いました。

言いたいことは、教を厳格に守っていくという生き方が、人間の生き方として正しいことには違いないけれど、それでいいのかという問題になると思います。ルースな生き方も許される、ということをお教える教育は必要ではないのか、ということですね。日本では、その辺のことがまだ追求されていないという気が大変いたします。

例えば、卑近な例を挙げますと、私は堀川通に面して住んでいるんですけど、いたるところに「横断歩道を渡りましょう」と書いてあるわけです。でも、私のマンションからバス停に行くには、そのまま渡ることが一番近いわけです。で、私は右を見て、左を見て安全を確かめてから自己責任で渡っております。でもね、すぐそこに小学校があり、中学校がある。小学生、中学生がいるときにはそれはしないことにしています。これは偽善者のやり方ですよ。で、その生き方は否定されるべきか。そういう生き方は肯定してもいいんじゃないか、と私は思うんですが、それは一つの例として挙げました。でも、人生の生き方として人間は弱いし、罪人であるし、しょっちゅう失敗をするわけです。新島襄も八重さんのことで、だいたい困ったんだということを、今日の伊藤先生のご発表から伺ったんですけどね。やっぱり、これで非常に新島先生の良さというものが出来たんじゃないでしょうか。



露口：どうぞ、井上先生。

井上：今の北垣先生のご発言に関連して、私は北垣先生よりも数年若いですが、やはり軍国主義、国家主義教育を徹底的に受けた世代です。同志社に来て、私に目を開かせてくれたのは、同志社の教育は「木を見て森も見なさい」という教育でした。別の言葉で言えば、「多様なものの見方をあなたは見つけなさいよ」ということでした。そういうことを是として私は50年近く教壇に立って、学生諸君に広い視点でものを考え、行動し、グローバルに生きるためには、日本という島国の考え方では通用しませんよ、ということを自分の体験を踏まえてしばしば語ってきました。

そこで、私が言いたいのは、会津藩は200年以上も前に藩祖保科正之から言われたことを、ひたすらに守り抜いた。私は守り抜くということのプラスの面というか必要性を認めながら、時代は動いているんだよ。そういう状況の中で、視点を変えて会津藩の生き残り策を考えるとということも、会津の藩主松平容保に求められた技量ではなかったのか。私に言わせれば、容保という人物はあまりにも徳川家に忠実で、誠実で愚直なまでにまじめ



な人物であった。その結果、彼の背後にいる会津藩の人たちの命を奪い、財産を奪い、会津藩を崩壊に導いたその責任はやはり容保にある、とそういうふうに思っております。

しかし、ここでは大きな声で言えますが、果たして会津に行ってこれが言えるのか。これはちょっとクエスチョンマークです。しかし、会津の人たちにもぼつぼつそういう批判の目というのか、いっぺん会津の歴史をひもといて、そういう視点で語っている人間もいるんですよ、ということを知っていただきたいですね。われわれの声がいずれは、何カ月か先に会津に届くかもしれない。また、会津から批判の矢が飛んでくるかもしれませんが、私どもはそれを敢えて受けて立ちたいと思っています。

それともう一つは、私は八重さんが17歳も年上の兄貴から影響を受けたという視点で話をしましたが、その影響を受けたことは、とりわけ覚馬が二回に渡って江戸に出府した。そこで佐久間象山やいろんな当時の開明派、洋学者から積極的に学んだ。あるいは、自分自身がペリーの7隻の軍艦を目の当たりにした。そういったことが、直接間接的に、まだ若かったですけども八重にも伝わって、そして八重の考え方があの閉鎖的な会津を乗り越えて鉄砲を用い、大砲をぶっぱなす女性に変身していったというように思っているんです。だから、80冊も八重に関する本が出たということですが、私が読んだ十数冊は、残念ながら、今、私が申し上げているような、覚馬が二度の江戸出府から学んだことで、八重さんが変わっていったのではないか、という視点には立っていません。以上です。

伊藤：ブレイクの詩に「1粒の砂に世界を見、1本の花に天国を見」、というのがありますが、「彼女の行いはハンサムです」の一行をもって八重の本質のように見るのは疑問です。逆のことも言えるのではないか。世界だと思っていたのは砂一粒にすぎない。天国を見つつもりで、現実には1本の花を見てそう思っただけだった、というように、八重を分かったつもりになったが、現実の八重についてはほとんど知らないということです。

北垣先生のおっしゃった「ルースな生き方を教える教育」は、とても大

切な問題提起で、非常に面白いのですが、じつは日本では、それもすでに文部省が管理を試みて失敗しています。ゆとり教育、ゆとりの時間を政府が設定して、時間表にしたがって教室内に生徒を縛り付けての「ゆとり」です。その言い訳は、勝手にさせたら不平等が生れる、という。それで、幸せなのかな、と思います。学校への拘束を減らし、各自に時間を与えればいい、当人にいちばん価値ある選択を自身でするはずで、そのかわり自己責任で判断してもらう。

新島の書簡

伊藤：私が一番知りたいと思っていますのは森中本の中で、八重宛書簡が柏木筆写となっていることです。『新島襄全集』の3巻の811ページのところに杉井先生によって「すべてこの書簡は柏木筆写の稿本によって掲載する」と注があります。つまり杉井先生は、現物は見ていないが、柏木筆写の稿本を見て『新島襄全集』を編集した。それが不完全なのは、柏木が昭和2年に筆写した時に、まる写しができなかった。現物が加工されていたか、一部筆写を断られたからではないでしょうか。八重が削除した可能性もあります（私信の受取人ですからその権利はあります）。昭和2年段階で書簡はすでに八重の手を離れており、八重の養女・初子の婚姻先の広津友信宅（東京）にあって、柏木は広津家に泊まり込みで筆写しています。その段階で、すでに資料が損なわれていた可能性が高いと思ったりします。インターネットで探したら、確か神戸の方で広津家の子孫の方が宝塚の植物園長であったことが出ていました。連絡が取れれば資料関係のことも分かるかなと思ったりもします。



もう一つは、書簡の日付について杉井先生が、柏木記入の日付である、と何通かについて注記している点です。ということは、書簡をちょん切っていたことで発信日が分からなくなっている書簡があって、それを筆写しているときに柏木が日付を確認して記入したのではないかと思います。何か分かれば教えていただきたいと思います。

八重と会津

露口：ありがとうございます。一言ずつが、もう日本論になってしまっている。日本の教育とか日本の国家論になってしまっている。それはともかく、今日の前のお二人の発表と最後の伊藤先生の発表はちょっとずれますよね。一応、テーマ的には、お三人のお話の順番が八重との関わりとして、まず、会津とそれから覚馬と襄ですから、これが八重像みたいなものに結びついてこなければ話にならないわけです。で、そういう媒介を通して、つまり八重さんそのもの、八重像について明らかにしたい訳です。八重さんの史料は乏しいんだから、だったら、八重を巡る一つの場所と二人を通して、八重がどう見えるかというのが基本的な今日のシンポジウムの目的なんです。日本論にいかれることはあるでしょうけれども、もちろん会津というところにいけば、そここのところをもう少し浮き彫りにしないと、今回のシンポジウムの趣旨に合わない感じがするわけです。

もちろん、とりわけ最後の伊藤先生のこのスクランダラスな報告は一層その感が強いわけで、最後、実は伊藤先生のところだけは、質問時間がなかったものですから。それと同時に伊藤先生の場合、出されている史料の検討という問題があって、われわれがあまり知らなかったような書簡が出てきたり、今日のシンポジウムの中で、誰一人、八重と公義には不倫関係があったといううわさが、こんな話が出るなんて誰も思っていないわけです。そういう話なのと。これも僕は大事なことだと思うし、八重のイメージをつくっていく上で、これは現実に史料としてあるわけだから、これは何らかの形で論じる必要はあろうかと思います。

どういったらいいのでしょうか。伊藤先生、一応、趣旨的に言いますと、襄を通して八重をいうときに、不倫を持って来られてもちょっと困るところがあって、伊藤先生のイメージとしての襄を通しての八重について、先生はどのような感想をお持ちですかね。

伊藤：襄はアメリカ生活が長いですから、アメリカでの女性の澁刺とした姿をよく知っていて、日本に帰った直後などに、日本では結婚相手が見つけれないだろうと思っていたという人です。そういうアメリカの東部の

中流ないし上流の中で、自分の意見をもってカクシャクとして生きているピューリタン女性を基準にすると、非常に物足りなかつただろうなと思いますね。

露口：ピューリタンな女性というのがかなり強くイメージされているだろうという。例えばハーディー夫人とか？

伊藤：そうですね、自分の意見を持っていて自由で闊達で、個人主義というものがよく分かっている人だろうと思います。

露口：新島の女性観というのはどういうものでしょうか。そこでいうピューリタンな女性という、すごく基本的には信仰がどこかベースにありますよね。

伊藤：たぶん、あるんでしょうね。ただ、僕は基督教のことはよく分からないんですけど……。ちょっと考えますので、また後で。

露口：新島がたった一言だけれども、ハンサムウーマンということをついたんだから、このハンサムウーマンというのを僕らはどう理解するかということ、まあ、一言なんだけれども、何か、全部に通じるような感じがするわけですよ。

伊藤：それは割と早い時期に、結婚前後のときにアメリカの知人に紹介するときに行った言葉です。

露口：そうですね、婚約してから、すぐですね。

伊藤：そうですね。だから、最後までハンサムウーマンとっていたかなあ、という……。

露口：そうですね。そうですね。

伊藤：われわれでも、結婚生活が長くなると、……

露口：そういう展開になったらよく分かりますけど、実感としてよく分かりますが、今はそこに行くときちょっと話が……。

お三人のお話を聞いてきて、一つは、まず、会津というものの影響の問題ですね。これ、少なくとも北垣先生はかなり強調されるわけです。で、覚馬になってくると、ちょっと会津と離れる。これは北垣先生もそうおっしゃっている。そうすると、この八重と会津の関係というのは、じゃあ、京都に来てからは、どんどんとは言いませぬけれども薄れていくのか。ど

ういう影響力みたいなものが八重の中に残りながら、少なくとも八重は京都時代を過ごすのか。

例えば、伊藤先生の話で言えば、坂本先生のスタークウェザーとの関わり合いの話がありましたね。あれでも、要するに、何となく佐久と八重が持っていた会津武士的なモラル感みたいなものと、スタークウェザーの考え方の衝突のような感を受けますよね。

そうすると、やはり、あの二人は会津のモラルはしっかり持ってたんだろうか。そういうものがややぼやけてくるわけです。クリスチャンであったこととか、覚馬の存在とか。一番強く、どちらかという、北垣先生のテーマによりますと、少なくとも会津は彼女の精神であり、よりどころであり、生き甲斐であったというように、生涯を通してね、というふうに北垣先生はおっしゃっている。これは、どういったらいいんでしょうかね。そういうさまざまな影響関係を考えた中でも、会津は頑強に八重の中に生きていたと。これは井上先生も一緒ですかね。

井上：87年の生涯の中で、八重さんは会津を中心に生活したのは20数年です。その後、京都を中心にして生活しますが、ところどころに常に会津を意識した行動をとっていることを認めます。彼女はわれわれが理解した会津を乗り越えている、あるいは会津にあまり縛られないで、もっと自主的、主体的に自分の判断で、生きている部分があるというのが私の解釈です。だから、87年をどっぷり会津で、会津戦争後も八重さんが生きていたのであれば、また別の生き方をしたでしょう。ところが、京都に来て、覚馬の影響を受けて、クリスチャンになって新島と結婚をして、そういう大きな生活の変化の中で彼女の考え方も広がっていったというふうに理解しています。

露口：影響力うんぬんっていうのはなかなかどういう指標で限定していったらいいのかわからないのです。僕は、少なくとも北垣先生と井上先生のご発表ですごく強く感じるの、特に井上先生がおっしゃいました、要するに家訓というのを後生大事にずっと抱えてきたんだ。だけど、実はこれ、会津での研究者の話なのですが、じゃあ、近世の間、会津はずっと家訓を神棚に上げながら、拝みながら生活をしてきたか、というところではない。

むしろ、家訓なんておろそかにされた時代なんていっぱいあって、つまり、何かが歴史に呼び出されるときは、幕末維新时期という時期だからこそ、家訓は膨張するんです。変な言い方ですが、井上先生にたてつくつもりはないですが、戦後になって先生は同志社に來られて同志社の自由主義教育みたいなのはあまり……。じゃあ、ファシズム期の同志社というのは、天皇陛下に対する忠誠ということ同志社大学のファシズム期はやっていたでしょう。

つまり、時代の中でそれぞれの人というのは、ものをとらえるのであって、それをフラットにとらえてしまうと誤るんじゃないですかね。誤るとするのが理解の……。つまり、家訓というのがとっても古いもので保守的で固陋でというレッテルを貼っておいて、そういうものに基づいて何か行動をとった人間に対して、一つの時代に、「これを固陋で保守的だ」というのは、時代を生きる人としては、理解、つまり幕末だから、別の例を言いますと、例えば、水戸藩というのがあって、水戸藩は水戸黄門ですから、光圀という人物がいるわけです。これが、近世の間ものすごく大きな影響力を持っているかという、そうでもないわけです。ところが、幕末になると呼び出されるんです、歴史の中から。つまり、過渡期というのは、そういう看板みたいなものが、もう一度呼び出されてくる。藩の根拠ですから。そういう時代の中で、そういう呼び出されたものを持って出て、じゃあ、そういうものに乗っ取ってものをやったから、これは保守的で固陋で、いわゆるそういうものが会津藩の不幸の基をつくったという図式は、どうも僕は時代の中で生きる人の考え方みたいなものにピタリと來ないんですけどね。

井上：露口先生はおそらく会津で、会津の研究家から家訓が200年を超える時間の経過の中で、必ずしも金科玉条のごとくに守り抜かれたのではありません、ということを知って來られた。私はそうかもしれませんが、むしろ、幕藩体制が堅固であったときこそ、家訓はそれほどみんなに守られなくても幕府はしっかりしてたし、会津藩もうまくいったわけですよ。ところが、あの家訓をもういっぺん金科玉条のごとくに守らなくちゃいけない時代というのが18世紀の終わりから19世紀にかけて、とりわけ、会津戦争、あるいは戊辰戦争のころに顕著に出てきたという事実がありますね。

だから、私が言いたいのは、会津の人たちは仮に私が最初に言ったように二百数十年ひたすらに守りぬいてきたことがなかったかもしれないけれども、むしろ、幕藩体制が崩壊しつつある中でこそ、家訓を守るという方に回るのか。いや、もう、俺たちは幕府の尻馬に乗っていたら会津藩がつぶれるぞ、大変な被害を被るぞ、という読みのもとに、それは容保がやるべきことだし、容保のブレインがやることですが、そういう判断のもとに軌道修正をする必要があったのではないか。それをやらないでひたすらに忠義を尽くしたということが、あの悲劇を招いた原因の一つだと私は言いたかったのです。

北垣：一つ例を挙げて申しますと会津藩の北の方に新発田藩というのがありました。私は新発田で13年間暮らしたもんですから、新発田のことはかなり勉強しました。新発田は小さくて弱かったですから、隣の強い会津藩からしょっちゅういじめられていたそうです。一つの例は、「止め塩事件です」。会津藩は蠟を産出したんですね。新発田藩は海に面しているから塩を産出していました。塩と蠟を毎年交換していたんです。ところがある年に会津藩から蠟がこなかったんです。だから、新発田藩はもういいんだなということで、塩を送らなかつたんです。そしたら、「なぜ、塩を送らないのか」と言ってとがめられたんですね。大藩からとがめられると新発田藩は縮こまってしまって、殿様を救わなくてはならないというので家老が、「その決断は私が独断でしました。誠に申し訳ありません」そういう弁解をしたんですね。そしたら、会津藩は、「お前は嘘をついているんだろう。主君を守るためにそんなことを言っているんだろう」と言って、炭火を起こしてその上に鉄の板を渡して、「この上を歩け。歩いたならば、おまえの言っていることを信じてやろう」とそれをやらせたんです。歩いたそうですよ。だけど、その後もやっぱり、そのことが原因でいじめられて、その家老は最後に切腹しました。そういう歴史が新発田藩にはあるんです。でも、そういうことは会津藩では誰も覚えてないです。

ですから、私は新発田に13年いたときに、ある日、学会で会津若松に行ったときに、敵地に乗り込んで来たという変な印象を受けました。そのときに、覚馬と八重の出身地であるということはまったく思い出さなかつた。本当

に変なものです。その新発田藩は幕末に政府軍につくか幕府につくかということで、江戸と京都の両方に出張所を置きまして、非常にビリビリ神経を尖らせながら両方の情報を集めたんですよ。そして、政府軍が新潟の太夫浜というところに上陸したら、パッと「私たちは政府軍の味方です」とお迎えに行って、それで政府軍が会津に向かったらその先陣を務めて、会津が降伏したらそのときにいばってね、何のかんの征服者の顔をしたということが歴史に出てくるんですよ。

そんな話を讀むと、本当に今、「八重の桜」で会津藩は気の毒だと思っただけですけどね、その気の毒な会津藩からいじめられた藩もあったということを見ると、やはり歴史は相対的に見なくちゃならないなということを感じます。

露口：言うところの会津藩の大藩としての凶暴な面とか、さまざまな家訓も含めて厳格な藩政みたいなものはあるんでしょうけど、そうすると、八重さんはそういう影響を大変強く受けて育ったんですね。そういうふうに分かればいいんですよ。ということは、そういう一種の教条主義というのか、権威主義というのか、今の言葉で言えば、あるいは非常に古い考え方とか、そこまでは言わないにしても、そういうような精神を少なくとも八重さんは吸収してきたぞ、ということを知ると、会津時代の八重さんは考えるべきだということではないですか。

こういう念押しは、僕が言いたいのは、時代が大きな変革期を迎えたときに、どういうものであろうと、人は一つの信条みたいなものを立てておかないと、明日死ぬかも分からないという状況が刻々と迫っている中で、会津の人たちがどこかで覚悟を固めていくとき、それは家訓であろうと、なんであろうと頼りにします。

そういう意味で、時代の中で迫った会津の危機を、少なくとも八重さんにとって大事なものは、そういう会津の一瞬の権威主義的な伝統とかというようなこともあるでしょうけども、でも、会津が四面楚歌になりながらも、この危機状況を彼女は全身で感じて会津戦争を生きたということが八重さんを理解するときにもかなり大事なのではないのでしょうかと思いますが、いかがですか。

北垣：一言付加えます。4番目の家訓は「婦人女子の言、一切聞くべからず」というものです。それから、什の掟でも「戸外で婦人と口をきいてはなりません」というのがあります。これを会津ではどう理解したのか。八重さんがどう理解したのか。誰もこれに対して文句を言うのを読んだことがないです。何かありますか、井上先生。その辺、どうなるでしょうね。

井上：北垣先生がおっしゃったことについては、寡聞にして知りませんが、けれども、しかし、会津が崩壊をしてから、例えば、山川家は非常に優れた人材を輩出していますね、男性、女性ともにね。アメリカに留学をし、東大の総長になり、錚々たる人物が出ています。彼等は会津の出身であり、会津を基礎にして成長していった。その基礎にしてというのは、私に言わせれば批判的に乗り越えていったという言い方をしたいですね。とりわけ、薩摩の陸軍大将と再婚をした山川捨松などは、もちろんアメリカに留学してアメリカの有名女子大を出たということもありますけれども、会津に縛られた女性ではないというように思っております。

露口：そこでも僕は疑義があるんですけども、先生の枠でいきますと、どうしても会津と非会津みたいなものの図式があって、僕は常に時代で考えるから、抵抗感を持っていたって出世もできるし、抵抗感を持って自分の将来を考えるとということはあると思うんですよ。つまり、時代の政府に対する抵抗感を抱きながら少なくとも近代を生きて、自分なりに例えば、東大の総長になることだって僕はできると思うんだけど、そこを価値観の大きな転換というふうなことも、言えるでしょうかね。

井上：先生が今、おっしゃったこと、藩主の松平容保に当てはめてみたら、彼は徳川家に抵抗していませんよ。最後の最後まで忠誠を尽くした人物です。どうですか。

露口：そのとおりです。だから、僕は容保のそこが優れたところだと思っているんですけど。

井上：逆ですよ。

露口：話が……。会津というようなものの影響を、八重の中にどういうものを見るかという観点でした。われわれが八重という人物に会津の影響は強いんだぞ、というときに、どういうものを中身に想定するかによって、

八重論が大いに変わり得るということを本当は考えたいわけです。これを決まり切った、だから、どうしても決まり切ったというふうに言わざるを得ないのは、什の掟が出てきたり、童子訓が出てきたり、こんなのでずっと説明されるわけですよ。もう、辟易するぐらいそういう本が多くいっぱいある。これだって、それは事実なんだろうけども、そういうようなもので八重がそんなに浮き彫りにできるのか、というようなことをいつも思いながら本を読んだりするわけですよ。だから、会津の影響というときにはすごくそういうことを思います。

覚馬と会津

露口：それでは、次に覚馬に移っていきますと、覚馬という人間の、何て言うんですかね、先進性、こういうようなことが盛んに言われています。覚馬がこれは、少なくとも京都の近代化をやるときに、木戸孝允とか榎村正直と手を組んだのは、ちっぽけな会津世界みたいなものを超克をしている、とお考えですかね。お二人の先生は？

井上：明治維新ですから、当然、会津を乗り越えて榎村が長州出身であっても京都の活性化、近代化に必要なであれば、うまく利用するという知恵を覚馬は持っていたというのが私の解釈です。

露口：そうすると、覚馬にとって、会津は過去のもの？

井上：やはり彼にとっての故郷は会津でありますから、会津を過去のものとして捨て去るのではなくて、彼の心のどこかに会津はあったでしょう。例えば、それは明治19～20年ごろでしょうか、会津出身の学生たちを集めて、覚馬は面倒をみてますね。ああいうのは、やはり自分が会津出身であることを意識しての行動ではないでしょうかね。

露口：容大もいますしね。

井上：容大も入ってましたね。

八重とキリスト教

露口：それから、もう一つはキリスト教だと思うんですけど。これはどうしても襄に関わってまいります。で、ここの点について伊藤先生のお話は

ちょっと伺いましたけれども、お二方の先生はとりわけ、北垣先生などはどのようにお考えですかね。八重とキリスト教。

北垣：京都へ来てからの八重は、確かに、覚馬から言われてキリスト教を学びました。ゴードンのところに通って聖書を勉強したりしています。そして、結婚して比較的早い時期に岸和田に伝道に行っていますね。特に岸和田には新島襄が行って、それから、山崎為徳が行って、それから、今度は Goulody という女性の宣教師と一緒に八重が伝道に行くんです。だから、八重もそういう時期が確かにあったんですね。それから第二公会の執事、つまり、役員をしています。だから、役員をしていた時期があるんです。でも、そういう時期があっても、何時までもというわけではないと思います。というのは、徳富猪一郎ですら、学生時代には伝道に行ったわけですから。でも、そのことと生涯信仰を貫くということとは、どうも別問題のように私には思えて仕方ありません。新島が死んだ後、八重が教会生活をしたということはどこにも書いてありませんし、教会には行ってないように思いますね。時々牧野虎次の四条教会に行ったということは出てきますけれども、しかし、彼女は同志社教会の会員であった、あり続けたはずなのに、教会生活をしてないということは事実です。

で、教会に日曜日に通うということは非常に簡単なことなんですけど、それをやってないということは、よくある例でありまして、洗礼は受けたけれども、救われていない。そういうケースの一つであるというふうに私は思います。

露口：僕ばかりしゃべっていてもいかなのですけれども、伊藤先生にお伺いしたいんですけど、襄と八重は結構旅行するんですよね。これがまた、1カ月とか何週間とかということがあるんですよ。そういうのが何回もあるんですけど、じゃあ、そのときに、一緒に行って襄は基本的に何をしているかという伝道ですよ。伝道旅行をするわけですよ。そうすると、襄と一緒に行動しているときの八重というのがあるわけですよ。ということは、新島襄の説教を聞いている八重がいるわけです。そういうようなことが少なくとも新島の年譜をずっと追っていくとあり得るわけです。こういうことが彼女にとって、どういう影響を与えたかどうかはともかくも、そ

ういう史料も眺めておかないと、分かりにくくなるという感じはします。

伊藤：おっしゃるとおりですね。ただ、新島襄の旅行のときのメモが残っていますが、説教の場に八重がいたとか、そういう記述のメモは知りません。精神的にどれ位キリスト教なのか、襄の説教に感銘を受けたならすこしは発言が残っていそうですが、ないのですね。二人の仲は良かったのでしょうか。夫婦と一緒に旅行できるということは、一つの仲良しの証拠ですけども、鉄砲撃ちなどは一緒でしたし。

露口：そうですね。それでね、北垣先生、ついでに言いますと、新島の旧邸ですね。あれは、第二公会ですよ。第二公会の記録とか、第二公会の記事を見ていると、これらを絶対に丁寧に見ていかないと駄目だと思うんですよ。だって、八重と新島襄の自宅なんだから、そこに八重がいるわけですよ。八重の具体的な行動は見えなくても、第二公会というところの新島の自宅で礼拝が行われるわけでしょう。これがどれくらいの頻度で行われたかというのを少なくとも台所に立っていようが、その宗教行事に八重は立ち会っている、立ち会っているという言い方は適当ではないかもしれない。そういうことを史料として挙げていかないと、八重のキリスト教はいつまでたっても分からないんじゃないですかね。どちらかというところクリスチャンとしてはもう一つで、やはり会津精神の持ち主だったという。

それと、もう一つ序でに言うと、僕はずっと言い続けるんだけど、人は生きていて、境遇の大きな変化があって、それなりのその時代時代を人は生きますよ。そのときに、襄という大黒柱を失った人間が、少々教会活動が少しおろそかになったり、あるいは彼女が自分なりの行動様式を一人になった時に見つけたときに、篤志看護婦をやったり、茶道に行ったりってことはあるだろう。これは人の生き様としてそういうことはあるだろう。だからといって、彼女が教会を全部捨てているかというところでもないだろう。そういう眺め方をしとかないと、同志社の人にとらえるときにいつも「会津士魂対クリスチャン」の図式でやられて、もう八重のキリスト教理解は不十分やったというのは、どうも人の理解として僕には何か、人は迷うもんだ。先生もおっしゃった、人は迷うもんだし、矛盾するもんだということをおっしゃいますから、これを一貫してあまり眺める

のもどうかというふうに思うんですが、いかがですかね。

北垣：今、おっしゃったことに関して、こういうふうに思います。確かに、八重の心に福音の種は蒔かれた。しかし、それは、十分成長しなかった。彼女はそれを失ったわけではない。成長はマチュアなところまではいかなかったというふうには私は理解します。

一つの事例ですが、京都は西京といいますが、西京第一公会、第二公会、第三公会と四番目の教会、西京第四公会というのが明治18年に富小路通四条下がるにできかかったんですね。それは中村栄助やら、町のクリスチャンやらが中心になって……。つまり第一、第二、第三は全部北の方にあるから、もっと南の方の市民も行ける教会が必要であるということで、第四公会をつくろうとしたんですね。現在は京都教会なんですけれど、その案が起こったときに八重は反対しております。それは、記録されております。どういう意味で反対かという、八重の当時の考え方では、学生と市民が一緒にいる教会がいいのである。それを学生を除いて市民だけの教会になると、あんまりうまくいかないだろうという立場から八重は反対したそうです。そのことは記録されています。だから、京都教会にいる私は新島八重が設立に反対した教会のメンバーであるということです。

伊藤：ちょっと質問なんですけどね、その新島襄が生きている間は彼の自宅が第二公会で、そこで礼拝を守ったのでしょうか。

露口：たぶん、生きている間から、新しくできました。ずっとそうじゃありません。でも、しばらくはそうですね。

北垣：そうです。しばらくはそうです。

伊藤：それで、亡くなってから第二公会というのは別の場所に移るわけですか、自宅から。

露口：亡くなってからではなくて、亡くなる前からです。

伊藤：そうですか。

フロアからのご意見とご質問

露口：もう時間も迫ってきました。どうぞ、フロアから今の討論も踏まえて、何かご意見、ならびにご質問がございましたら、ここで受けたいと思いま

すが、どうぞ。

フロア A：貴重なお話をありがとうございました。私は昨年申し上げたかもしれませんがけれども、先祖の一人が会津の池上新太郎ということで、白虎隊の池上新太郎というのが、私の高祖母のいところでございまして、そういう意味で会津なんですけれども、また、実家が郡山ですから、会津と郡山のミックスです。そういう中で先ほどのお話の中で、ちょっと、会津が頑なで家訓をずっと金科玉条にしていた。それが第二次大戦と類似しているというお話をいただきました。私の理解としましては、家訓はあくまで守護職になるときは家訓でしたけれども、戊辰戦争のときは、もう家訓は関係なくて、慶喜がもう将軍じゃなくなりましたから、将軍家に尽くす、相手の将軍家がないものですから、家訓は関係ないと思っております。

で、幕末は公議政体派、パブリックオピニオンで議会派が主流だったわけで、その中で倒幕派というのはあくまで薩摩と長州だけで、それが大政奉還によってうんと劣勢に立ちまして、そこの中で、最終的には武力でやらないとなかなか政権が取れないということで、戊辰戦争が始まったという中では、どうしても戦わないといけない。その相手が会津になったというような理解をしています。

私は子どものときは、別に白虎隊が先祖なんて話は親からも聞いてなくて、福島の人間でしたので、会津だけではなくて、東北一般に戊辰戦争で結構犠牲になっておりますので、そういう意味では会津だけではなくて、われわれ東北人というのは非常にやられたと。それもゆえなくやられたみたいな意識は非常に強かったです。逆に会津は、仙台は最後まで戦ってくれなかったとか、中でいろいろと悪口を言うんですね。それは、非常に会津の狭い心というのか、どうもそういうふうにどんだんって行って、自分たちだけが頑張っているみたいになっているので、そこは批判を私はしているんです。だから、それは会津藩だからどうのこうのというより東北全般がやられたというところをご理解いただきたいと思っております。

あと、コメントですが、八重の不倫疑惑ですが、これは私が事実かどうかは分かりませんが、次の5つの点で違うのではないかと申し上げたいと思います。まず、公義との不倫の話は本井先生も『八重さん、お乗り

になりますか』という本で少し述べられておりましたので、私も承知しておりました。それに対して、私はそうじゃないだろうと思う論点が5つございます。まず、八重は時榮を追い出しました。「ならぬものはならぬものです」と追い出しました。その人間が自分が不倫をしたら、これは会津教育の崩壊ですね。会津の先ほどの皆さんが主張されていたように、会津の教育があれだけよかったという話が、八重に至って崩壊する形になりますので、これはどうなんだろうというのが一つです。

2つ目が、先ほど伊藤先生の方からご紹介いただいた不倫の時期が明治22年の秋とか冬。襄がもうすぐ亡くなっちゃうときですね。もし、それで襄が亡くなったら、八重はあれだけがっかりして病気になるのでしょうか、というところです。最愛の襄ということで、色紙(?)を書いておられますし、そういう意味では時期的とその後の八重のことも見ても、そうではないんじゃないかと思っております。で、襄が亡くなって2カ月目に蘇峰に八重は手紙を書きますけど、そこの追伸のところで公義のことを「ネズミのふん」と呼んでいます。ちょろちょろしていると、で、いかに例えば、疑惑を隠すために、不倫を隠すために悪口を言うこともあるかもしれませんが、それでももし不倫をしていた内々で好きな方だったら、ネズミのふんとは言わないと思いますね。あとはやっぱり最後まで八重は独身をずっと貫いていますので、そういう意味ではそのような性格のある方だったら、襄が亡くなった後も同志社には若い学生がいっぱいいるわけですから、また、いろいろな恋心ができるんじゃないかと。そういうことから考えますと、私は八重は不倫ではなくて、そういううわさをあえてとりたてて流した人がいると。ここは、金森がそれを真に受けて襄に言ったことに対して、襄は非常に腹を立てて、金森も馬鹿者だと思ったのではないかと思っております、それがまた、後々、金森が校長にならなかった、後任に指名されなかったことなのかもしれない、と思っております。コメント、長くてすみません。**伊藤**：金森が言っただろうというのは、私の推測で事実かどうかは分かりません。むしろ、新島襄が疑っているのは、湯浅吉郎であります。彼が言いふらしているに相違ないと言っています。これは、たぶん、石倉さんが来年度にこの書簡を公開しますから、『同志社談叢』で書簡が出てきて、名

前が出ると思います。

フロア A：金森は言ったと言っています。

伊藤：ああ、そうですか。

露口：はい、どうぞ。

フロア B：八重さんのことについて、いろんな話が出てきて、私個人としては、何も八重さんのことが特別分かっているわけではないんですけども、伊藤先生のお話では徳富蘆花がずいぶん激しく批判をしているようです。蘆花という人物像で、私の頭の中に入っているのは、非常に男尊女卑の激しい人であると。そして、また、曾野綾子さんが書いておられる随筆で、女学校をつくられた矢嶋楫子さんが、離縁をした時のことに対して、徳富蘆花は、「女としてくずだ」というような言い方をしている。ところが、その旦那さんは毎晩、酒を飲むと槍を振り回して、楫子さんを追いかけ回したと。そこまでのことを知っていて蘆花が楫子さんをほろかすに言っていると。その蘆花がここで八重さんのことをほろかすに言っていることを聞いて、僕自身は蘆花の方が信用できないな、というような気がするんですけど、どうでしょうか。

伊藤：確かに、蘆花はそういう思い込みや偏見が強い人だと思います。矢嶋楫子に関しましては、自分の叔母に当たるわけですけども、やはり道義的に許されないという怒りがあった。それは離縁した後で、実は別の男と関係を持っていたのに、それを隠して婦人矯風会の仕事をして、偽善者だという怒りです。そのことを告白すべきだと迫って、晩年になって楫子はそれを告白してるんですね。それが中野好夫の『蘆花徳富健次郎』の一番最初のところに引用されています。

ただ、中野好夫は「蘆花の性的関係についてはそういう寢室の個人的なことは興味がない」と言って逃げて書かないのです。けれども、蘆花自身が非常に不幸な性的遍歴をしていて、5歳のときに童貞を奪われるという悲劇があります。それがずっと重荷になって恋愛もうまくできない人間なのです。そのことはこの(『明治思想史の一断面』)中に書いておいたんです。そういう人が、唯一結婚できると思っていた山本久栄との結婚が妨害された。その最たる妨害の相手が八重であったということで、恨んでいたのは

事実ですね。非常にきつい怒りを持っていたのは事実であります。

ただ、ここでも、「と言われている」という伝聞体で書いているのですね。蘆花はほかでも時栄についても、間違った伝聞を書いていて、それは丸本さんという方が直されているんですけども、久栄の母の時栄は（三味線の）ばちを持って遊郭で働いていた女性であったと書いていたために、その時栄さんの実家の一族が全くの濡れ衣を着せられておりました。時栄さんは武家の出で、それは間違いだったことが分かっています。

八重に関してもいずれにしても伝聞のうわさですが、ただ、単に蘆花の思い込みではなくて、学生間の間にそれが流れていたという事実があったということを『黒い眼と茶色の目』のここで書いて、それに対応することを、実は新島襄が徳富猪一郎に相談をしている。「あらぬうわさがある」新島襄は「非常にそんなはずはあり得ないことだが」と言いながら言っていると。全然奥さんを疑わない立派なところがあるのですけどね。不思議ですね。

露口：おそれ入ります。時間が……。たくさんいらっしゃるんです。じゃあ、できるだけたくさん聞きましょう。どうぞ。

フロアC：毎週ドラマを楽しくみているんですが2点、申し上げたいことがあります。

まず、一つは新島八重のクリスチャンについて、いろいろと話題になっていたんですけど。私も20年ぐらい前に、洗礼を受けているんですけど、教会を行ったり行かなかったりです。北垣先生は毎週教会に通うというのはすごく簡単なことだとおっしゃったんですが、自分にとってはすごく難しいことです。だから八重が行けなくなった気持ちもよく分かって、八重のことをいろいろ批判する人がいたり、面白くないし茶道でもやっている方が楽しいし、建仁寺の和尚さんとしゃべっている方がキリスト教とは違うけど、新島襄がいたときは、新島襄と一緒に教会へ行っていたけど、やっぱりあとは建仁寺の和尚さんの方が気が合うし、というように乗り換える気持ちもすごく分かるんですね。

あと、会津藩のことですけど、一つメモしておいてもらいたいと思うホームページがあって、志村英盛という人が書いていたんですけど、そこに会津藩がなぜ、負けていったかという、井上先生がおっしゃるように容

保がなぜ、駄目になっていったか、ちょっと批判的なことが書いてあって。容保は京都守護職というもっともリーダー的な位置にしながらも、情報音痴だった。彼は自分についても味方についても敵についても朝廷についても、国内情勢、国際情勢についても知らなさすぎた。それと武士道が会津にはあったんですけど、それは武士階級だけの藩であって、領民にはすごくひどいことをさせていて、偽金造りまでやってのけた、と書いてありました。会津藩は領民のことはあまり思ってなくて、長州藩とかだったら、領民皆兵の奇兵隊を作って戦ったりしてたんですけど、会津はそういうこともせずに、幕府、幕府とってどんどん追い詰められていった、ということが書いてあるのです。容保は聞く、調べる、尋ねるということができない人で、取り残されていったんじゃないか、ということとそのホームページにあるので、もし、良かったら見てください。

露口：どうぞ。

フロア D：先ほどから、会津の松平容保が家訓十五条を頑なに守ったために、いろいろ弊害を被ったと。たくさんの人が亡くなったり、会津戦争が起こって崩落したということなんですけど。容保がいるときに、孝明天皇がいて、孝明天皇は非常に容保に対する理解があったし、お互いにツーカーで、協力しあったということで、孝明天皇からご宸翰^{しんかん}、御製^{ぎよせい}を賜ってますよね。それは、終生肌身離さないと思ったのですが、テレビを見てみますと時々もらっているようなことをほかの家来たちに言っています。それがどちらなのかは分かりませんが、ご宸翰なり御製は、一種の錦の御旗みたいなもので、それがあれば賊軍だとか朝敵だとか言われる筋合いではなかったと思うんですね。どうして、それをもっと公にしなかったのか。それを利用しなかったのか。私はいつも思って、今回のテレビを見てても思うんですけど、先生方、そういうことに対して何かお知恵がありましたら、お教えください。

露口：僕が答えるわけではありませんが、まず、宸翰については、松平家はずっと代々持っていたそうです。あの容保以後、現在でも当然家宝のようにずっと持っている。今はどこかに委託しているかも分かりませんが、とにかく松平家はずっと抱えて来たというようなことですね。

つぎに、なぜ公にしなかったというご質問ですが、実はご宸翰は明治になって公にはしています。こういうのは、家臣団の連中は、こういうのをもらったというのは、たとえば、山川浩がまとめている『京都守護職始末』みたいなものにも何度も強調しています。これは会津藩は絶えず公開する機会があればやっていますので、明治以来やっているとします。

フロア D: 鳥羽伏見のときはどうでしたか？

露口: それは、だからといって鳥羽伏見のときにご宸翰を目の前にして、やったわけではないだろうとは思いますがけれども。幕末段階で、それほど、でも、これは知られていることでしょうね、もう間違いなく、こういう宸翰が容保のもとに届いたというのは。これは会津藩にとって絶対に公開すると思えますね。

フロア D: それは、長州や薩摩は、

露口: もちろん、知っていると思えます。あまり確信的に言ってはいけないかもしれないですけど。

フロア E: 今お話しされておることは、たいてい歴史的なものであれば、武士におけるお話からみんな推測されているんですね、というような気がします。先ほど、フロアの方からお話がありましたけれども、結局庶民からの文言は、例えば、例の小田山に新政府軍が大砲を置きますけれども、あれはそこのお寺のお坊さんが誘導するわけですね、ここから行くところに行くことで……。だから、やっぱり会津藩が京都に出て行ったから苦しかったから、年貢の取り立てとか非常に厳しかったということがあって、ああいう寝返りとか庶民から見たものでやるとか。

あるいはわれわれのところにはあまり出てきませんが、ヤアヤヤ事件とか言って、一揆もあったとか、あるいは明治新政府軍についた外国の記者などの報道で、批判的に会津のやり方がひどいことを報じたので、庶民からは、逆に言えば、負けたことによって、賛同を受けたとか。で、僕らの勉強にそんなことほとんど出てこないんですね。結果的には僕は容保が守ったということで、やっぱり赤穂浪士ではないですけども、美しいという。あれが、簡単にポチャンとなってしまうたら、仙台藩や、もう、負けてしまったのかということとあまり美しくないけれども、会津が最後まで、会津の庶民

の方には非常に気の毒になるんですけど、あの人らが頑張ったために美しい歴史が残ったという、僕はそういうふうに感じます。

それから、八重がいつまでも会津だったのか、というのはいつまでも僕は会津だったと思う。結局、勢津子さんが秩父宮さんと結婚されて、良かった、良かったと言いながらも、話す相手がいない。「京都では話す相手がいないから」と言う意味の歌を残してますよね。彼女はいつまでも、心は会津にあったような気がしますから、八重さんも会津には思い入れがあり、いつまでも京都の人ではなかった。どこに行っても寂しかったのではないかなと思います。終わります。

フロアF: さっき、司会者の先生がおっしゃいましたけど、NHKの番組を見ても80冊の八重関係の本を見ても、すっきりしないというような意味を言われましたけど、私も同じなんです。なぜ、すっきりしないのか。NHKの番組も私は「八重の桜」の次に出てくる「酔いどれ小籾次」の方が面白いんです。なぜかというと「酔いどれ小籾次」に出てくる剣の達人ですよ、老人で。これは必ず勝つんです。結末は分かっている。絶対に負けない。それが正義なんです。正義を持ってるんです。世の腐敗に対してわしは戦うんだと。これは見ると、スキッとするんですよ、気分が。だから僕は、「八重の桜」よりも「酔いどれ小籾次」の方が視聴率が高いと思いますよ。

われわれはそれでは、新島襄、八重、それから覚馬3人をどうとらえるか？ やっぱり正義か不正義かという物差しがいると思うんです。正義を求めようとしているのは誰なのか。それが新島の志だったと私は思うんです。その理由は聖書を挙げたいですね。旧約聖書と新約聖書があります。旧約聖書の頭は何ですか。アダムとイブの誕生の物語でしょう。これね、禁断の実を取ってはいけないという筋書きの始まりなんです。幕開けなんです。禁断の実を取るやつは不正義なんです。取ってはいけない。だから、正義か不正義かという物差しが旧約聖書の頭から出てくるんです。新約聖書の最後は、十字架上のキリストなんです。キリストはなぜ、十字架につけられて死ななければならなかったのか。やっぱり正義に対するイエスの最後の表現なんです。不正義に対しては私は従いませんと、いう一貫し

た姿勢を聖書は示している。

この聖書を新島先生は志のモットーにされたと思います。そうすると、その物差しから同志社人は離れない方がいいと。離れたらいけないというふうには私思うんです。その正義か不正義か、聖書に基づいて理解をするということが、新島先生の遺志に一番近づくことではないかと思っております。

今日、ここに出てきまして、正義と不正義は出てこないんですよ。物差しとして出てこないんですよ。これは同志社人として、これでいいのか、という問いかけをさせていただきたいと思います。北垣先生如何ですか？

北垣：賛成です。但しキリスト教は正義を大事にしますが、それ以上に愛を大切にします。

井上：封建武士の生き方という視点からすれば、容保の生き方は正義にかないますね。ひたすらに、彼は徳川に忠誠を尽くし、武士として藩主としての生き方を貫きましたね。しかし、あの幕末の薩長の動き、あるいは京都の墮落した公家たちが右往左往し、天皇を担ぎ上げて利用するということしか考えられないような彼らからすれば、その正義という概念そのものが1862年でしたか、容保が京都守護職に任命されたあたりから極端に崩壊をしていく時期だと思います。暗殺が日常化し、もう本当に厳しい中でよくも会津藩は頑張った、覚馬も頑張ったというのが私の印象ですね。だから、正義という概念を普遍性を持ったものとして理解するのか、ああいう幕末の泥沼化した中で解釈するのか、ということによって変わって来ると思うんですよ。

伊藤：2点申し上げたいと思います。一つは会津藩の庶民と士族では会津戦争に対する姿勢がまったく違うんじゃないかと言う点です。これはよく言われている点でして、これだけ会津藩が攻められているのに農民たちはおにぎりを持って高見の見物をしている。攻め方の大将であった板垣退助は啞然としているのですね。板垣はここから、日本のナショナリズムを作り上げるには、庶民を変えていかないといけないことを痛感した、と会津戦争の感想を言っています。会津藩といっても士族以外の人々もいたのです。

それから、忠誠心の問題ですが、忠誠と反逆の問題は、何に対する忠誠と反逆かということ、忠誠観には内容がいろいろと、特に戦乱期になりますと分かれてきます。組織忠誠、人格忠誠、原理忠誠の問題です。組織に対する忠誠、藩に対する忠誠の問題があります。それから人に対する忠誠、自分の信頼して来た人に対する忠誠の問題。それから、もう一つは原理に対する忠誠です。正義の原則に照らして、許せない、許せるという原則原理に対する忠誠の問題。これが幕末の動乱期の中では非常に分離し、混乱してきて一筋縄ではいきません。だから、会津藩なんかでも自分たちは原理に対しては忠誠だったし、孝明天皇に対しても忠誠だったのではないか。つまり正統だったのに、賊と言われているじゃないか、という不満が非常にあります。

「大阪毎日」のお配りしました資料の中の3段目の真ん中過ぎのところで、旧会津藩士の藤田という人が、法要の席で、「会津藩は賊なのか、官軍に正義があるや」、とても意味深い議論をしています。歴史の現実と正義との背反のことですが、読んでいただければと思います。

露口：いかがでしょうか。もうよろしいでしょうか。

われわれが常に心がけたいところは、これは、研究会ですので、多様なアプローチ方法とそれから、多様な価値観があっているんだ。むしろ研究というのは、今日、こういうシンポジウムを開きましたが、八重について一定のイメージをというわけではなしに、もう、お三方のご報告をお聞きいただければお分かりのように、あるいは議論でお分かりのように、かなりバラバラです。でも、八重に対するイメージをそれぞれが感じ、受け取っていただいて、それを具体的に研究という形で深められれば、このシンポジウムをやった役割があるというものだと思いますので、シンポジウムについてある特定の結論を求めるということは、基本的にはございません。それぞれがこのシンポジウムを聞いていただいて、また、八重について議論を、そして、この第一研究は今年は第二ステージというふうに書いていますので、来年度は第三ステージがあるはずなんで、来年度の8月の研究会でなんらかの八重論的なものまとめというようなところにいければいいな、というのがこの研究会の全体の運営委員会の方々の意向であ



ります。そういきますかどうか。ご研究に励んでいただければというふう
に思っております。これにて、

フロア G: ちょっと、八重さんのええところばかり言っているわけです。たっ
たそれだけで「八重さんはこうやったでしょう」と言うのは間違いと思う。
反対のこともいっぱいあるので、その情報も知らせてもらわないと。ええ
ことばかり並べて「ああ良かった。良かった」と手を叩いていたらあかん
と思います。

露口: 分かりました。私が言ったのが、そう聞こえましたか。どうも、僕
は全くそういうつもりで言った訳ではないんですが、それぞれでご研究を
なさっていただければというふうには思っているわけです。

以上、こちらの方の意向も踏まえまして、これにてシンポジウムを終わ
らせていただきます。先生方、フロアーの皆様ありがとうございました。
どうもお疲れさまです。

(文責：編集委員会)